論　文 ニダバ (*Nidaba*) 35(2006), 56-64

イタリア語の近過去における助動詞の選択の基準について

― 意味論的観点からの提案 ―

Chiara ZAMBORLIN

0 はじめに

すべてのイタリア語の複合時制は［助動詞 *essere* または *avere*＋過去分詞］で作られる。近過去の場合には、助動詞の時制は直接法現在である。しかし、その助動詞の選び方は、イタリア語を外国語として学ぶ日本人ばかりではなくヨーロッパ諸言語を母国語とする学習者にも簡単なものではない。

イタリア語の複合時制の作り方は、伝統的な文法論では次のように説明されている：

複合時制は［助動詞 *essere* か *avere*＋過去分詞］によって作られる。他動詞は必ず助動詞 *avere* を要求する。自動詞の場合には、*essere* か *avere* のどちらを選ぶべきかについて一つの規則を用意することは不可能である (Dardano & Trifone 1985: 200; Serianni 1991: 392)。しかしながら応用言語学的には、この説明は明らかに不十分である。

本稿の目的は、イタリア語の近過去における助動詞の選び方を説明する基準を一つにまとめることである。そこでまず、伝統的な文法論の説明を分析し、その弱点を示す。次に、THETA THEORY（セータ理論）(Salvi 1988, Haegeman 1994) を援用して、助動詞の選択に関する新しい基準を作る。最後に、新しい基準を用いた授業の結果を報告することにする。

1 伝統的なイタリア語文法の見方

ここでは近過去について伝統的な文法の記述を考えてみたい。伝統的な記述は次の四つに分けられる：

1） Rohlfs (1996) の歴史的な文法論
2） Katerinov (1992) の外国人のためのイタリア語文法
3） Dardano & Trifone (1985), Serianni (1991) と Lepschy & Lepschy (1993) の記述的な文法論
4） Savino (2003)イタリアの中学校で使用されている国語文法の教科書

これらの説明を分析すれば、次のような規則が組み立てられる：

表１：伝統的な文法論によるイタリア語の複合時制における助動詞の選び方

イタリア語の複合時制は［助動詞　*avere*　か　*essere*　＋　過去分詞］で作られる
①　助動詞　*avere* は、次のような動詞と共に使われる： • 全ての他動詞（例：*amare*　*愛する*、*mangiare*　*食べる*、等） • 目的地を表わさず、移動のみを表わすいくつかの自動詞 （例：*camminare*　*歩く*、*passeggiare*　*散歩する*、*viaggiare*　*旅行する*、等） • 目的に注目せず、ただ具体的な動作か行為を表すいくつかの自動詞 （例：*dormire*　*寝る*、*lavorare*　*働く*、*ridere*　*笑う*、*tacere*　*黙る*、等）
②　助動詞　*essere*　は、次のような動詞と共に使われる： • 移動だけでなく、目的地か出発点を表すいくつかの自動詞 （例：*andare*　*行く*、　*partire*　*出発する*、*uscire*　*出る*、*salire*　*昇る*、等） • 主語の状態に注目する自動詞 （例：*rimanere* *残る*、*stare* *居る*、*esistere* *存在する*、等） • 全ての再帰動詞（例：*alzarsi* *起きる*、*accorgersi* *気づく*、等）

上の説明（表１）には次のような弱点がある。説明は長すぎるうえに、動詞の意味上関係がない色々な断片によって組み立てられている。さらに、意味論的には、*bastare* *足りる*、*diventare* *～になる*、*morire* *死ぬ*、*nascere* *生まれる*、*piacere* *気に入る*、*succedere* *起こる*、*affondare*　*沈む*、等の多数の動詞がどのグループに属するのか決定できない。

イタリア語を外国語として教える場合には、特に上記の複雑な説明よりも総合的な規則が求められなければならないだろう。たとえば、Serianni (1991: 392) によると、自動詞における助動詞の選び方は以下のように説明される。

助動詞　*essere*　を要求する自動詞には一つの特性がある。それは、*essere* 助動詞を用いる動詞の過去分詞は名詞の限定詞として使うことが可能である（例１①）：

例１　① Il treno **arrivato** in ritardo.

遅れて来た〔過去分詞—限定詞〕電車

② Il treno **è arrivato** in ritardo.

電車が遅れて来た〔助動詞　*essere* ＋　過去分詞〕

過去分詞が名詞の限定詞として使われない自動詞（例２①）は、他動詞と同じように助動詞　*avere*　を要求する：

例２　① ＊Il cane **abbaiato** tutta la notte.

一晩中吠えた〔過去分詞—限定詞〕犬

② Il cane **ha abbaiato** tutta la notte.

犬が一晩中吠えた〔助動詞　*avere* ＋　過去分詞〕

しかし、外国語としてイタリア語を教える時に、この規則は極めて不適切である。なぜならば、上の例１①と例２①のような文が文法的に適切かどうかを決めることは、イタリア語が母国語である者か near native の者でない限り不可能である。従って、これまでの記

述の中では確かに Serianni (1991: 392) の説明は一番論理的であるものの、応用言語学的な適用性はないと言える。

2 THETA THEORY と非対格性のテストにおいてより適切な規則を求める

2.1 「主語」の定義

イタリア語の近過去における助動詞の総合的な選択基準を求めるために、まず「主語」の概念を明らかにすべきである。伝統文法 (Serianni 1991) によると「主語」は動詞の動作を実現させるものである。しかし、この定義は主語が意志を持っているか動詞が行為を表している場合にしかあてはまらない。THETA THEORY (Salvi 1988, Haegeman 1994) による次の例文を見ると、上に述べた定義の弱点は明らかになる。「主語」に相当する項は様々な役割を果たしているからである：

例３ ① **Questa chiave** apre la porta. (INSTRUMENT – 道具)
この鍵はドアをあける

② **Maria** ha sentito un rumore. (EXPERIENCER – 経験者)
マリアは物音を聞いた

③ **Gianni** ha una casa al mare. (BENEFICIARY – 受益者)
ジャンニは海の近くに家を持っている

④ **La piazza** brulicava di giovani. (LOCATION – 位置)
広場は若者でごった返していた

⑤ **Il tifone** ha danneggiato il tempio. (SOURCE – 起点)
台風はお寺に被害を与えた

⑥ **Il cane** ha rincorso la palla. (AGENT – 行為者)
犬はボールを追いかけた

⑦ **La palla** è rotolata nel fiume. (THEME – 主題)
ボールは川に転がっていった

例３①—⑦の中で、動詞の動作を行為的に実現する項は例３⑥の行為者だけである。したがって、伝統文法における「主語」の定義は行為者にしかあてはまらない。

2.2 非対格動詞

イタリア語の近過去における助動詞の選び方の問題を解決するためには、主題の役割をになう主語は特に興味深い。意味論的な面で、主題である主語は動詞が表わす動作か影響を行わず、むしろその動作か影響を受動的に受けるものである。例えば、上の例３①—⑦の中で、例３⑦の主語にだけ主題の特性がある。なぜなら *rotolare* (転がる)という出来事は主語 *la palla* (ボール) が行っている動作ではなく、主語が受けている状況だからである。

生成文法（Graffi 1994）によると、主語が主題の役割をになう動詞は非対格動詞で、他動詞と自動詞とは関係のない特殊な動詞の分類である。伝統的なイタリア語文法論においては、非対格動詞の存在が無視されている。

上に述べたように、非対格動詞の主語は表面的には、文法的な主語の典型的な特徴（主格、動詞と主語の一致）を持つ。しかし、深層に目をむけると、非対格動詞の主語には直接目的語の意味論的な特性があることが明らかになる[2]。この特性は非対格性について次のようなテストによって説明される (Graffi 1994 及び Salvi 1988 参考)。

a. 部分代名詞「ne」は非対格動詞の主語の代わりに使われる：

例４　Arrivano molti ragazzi → **Ne** arrivano molti. [*arrivare* (到着する)、非対格動詞]
　　たくさんの少年達が到着する→（**Ne**—少年達）たくさん到着する

同じように、部分代名詞「*ne*」は、他動詞の直接目的語の代わりに使われる：

例５　Gianni fuma troppe sigarette → **Ne** fuma troppe. [*fumare* (吸う)、他動詞]
　　ジャンニはタバコを吸い過ぎる→ (**Ne**—タバコを)たくさん吸い過ぎる

これに対して部分代名詞「*ne*」は自動詞（非能格動詞[3]）の主語の代わりに使われない：

例６　Molti ragazzi ridono→***Ne** ridono molti. [*ridere* (笑う)、自動詞（非能格動詞）]
　　たくさんの少年達は笑う→（***Ne**—少年達は）笑う

b. 非対格動詞は、過去分詞が名詞の修飾語として使われる：

例７　Un treno **partito** in ritardo. [*partire* (出発する)、非対格動詞]
　　遅れて出発した列車

同じように、受け身形において他動詞の過去分詞は名詞の修飾語として使われる：

例８　Una pizza **mangiata** di fretta. [*mangiare* (食べる)、他動詞受け身形]
　　急いで食べられた一枚のピザ

しかし、自動詞（非能格動詞）の場合には、過去分詞が名詞の修飾語として使われない：

例９　*Una ragazza **lavorata** tutto il giorno. [*lavorare* (働く)、自動詞（非能格動詞）]
　　*一日中働いた一人の少女

c. 非対格動詞の過去分詞を用いて独立分詞構文 (participio assoluto) が作られる：

例１０　**Giunto il maestro**, il concerto è cominciato. [*giungere* (来る)、非対格動詞]
　　指揮者が来て、コンサートが始まった

同じように、他動詞の過去分詞を用いて独立分詞構文（受け身文）を作ることが可能である：

例１１　**Bevuto il vino**, ci siamo ubriacati. [*bere* (飲む)、他動詞]
　　ワインを飲んで、私たちは酔っぱらった

しかし、自動詞（非能格動詞）の過去分詞は独立分詞構文を作ることができない：

例１２　***Telefonato Gianni**, sono uscita. [*telefonare* (電話する)、自動詞（非能格動詞）]
　　*ジャンニが電話した後で、私は家を出た

この論文の目的のために、最も興味深いテストが次のテストである。

d. 非対格動詞（例１３①）は、複合時制において、助動詞 *essere* を要求する。その一方で、他動詞（例１３②）と自動詞（非能格動詞）（例１３③）は助動詞 *avere* を要求する。

例１３　① Il treno **è partito** in ritardo. [*partire* (出発する)、非対格動詞]
列車は遅れて出発した

② Ho **mangiato** la pizza di fretta. [*mangiare* (食べる)、他動詞受け身形]
（私は）急いでピザを食べた

③ La ragazza ha **lavorato** tutto il giorno. [*lavorare* (働く)、自動詞（非能格動詞）]
その少女は一日中働いた

生成文法によると、非対格動詞の主語は深層では直接目的語のような働きがある。複合時制において、助動詞 *essere* を要求することは他動詞の受け身形の作り方によく似ている。他動詞の受け身形も［助動詞 *essere*＋過去分詞］で作られるからである。この場合、文法的な主語は受け身形においては、主題である他動詞の直接目的語（例１４①）である：

例１４　① **Il cane** [AGENTE– 行為者] rincorre **la palla** [TEMA – 主題].
犬が[AGENTE– 行為者] ボールを[THEME – 主題] 追いかける

② **La palla** [TEMA – 主題] è rincorsa **dal cane** [AGENTE – 行為者].
ボールは [TEMA – 主題] 犬に [AGENTE – 行為者] 追いかけられている

2.3 新しい総合的な規則—イタリア語の近過去における助動詞の選択基準

THETA THEORY と非対格性のテストによって、近過去を始めとする、イタリア語の複合時制における助動詞の選択基準は次のように設けることができるだろう：

表２：イタリア語の複合時制における助動詞の新しい選択基準

イタリア語の複合時制は［助動詞 *avere* または *essere*＋過去分詞］で作られる
助動詞　*avere* を要求するもの： • 全ての他動詞（例：*amare* 愛する、*mangiare* 食べる、等） • 全ての自動詞（非能格動詞）（例：*dormire* 寝る、*lavorare* 働く、等）
助動詞　*essere* を要求するもの： • 再帰動詞を含めた非対格動詞（例：*arrivare* 着く、*alzarsi* 起きる、等）

表１の伝統的な説明と比べれば、表２の概略的に述べられた基準は、より総括的で効果的である。ただしイタリア語を外国語として教える際には、表２の基準とその理論的な根拠をそのまま説明したとしても、学習者に容易に理解させられるとは言い難い。

また、外国人向けのイタリア語外国語文法の教科書の中では、非対格動詞の概念が無視されている[4]。しかしながら、イタリア語を外国語として教えるとき、非対格動詞を簡単に見分けるための単純な基準を提供することは極めて重大である。

イタリア語には非対格動詞の概念を応用するのに、まず、動詞をグループに分ける基準を見つけなければならない（Zamborlin 2005)。最も効果的な方法は意味論的なテストである。

1）他動詞は（例：*amare*　*愛する*、*mangiare*　*食べる*、等）直接目的語がある。

2）自動詞は（非能格動詞、例：*dormire*　*寝る*、*lavorare*　*働く*、等）直接目的語がない。

3）非対格動詞は（例：*partire*　*出発する*、*venire*　*来る*、等）自動詞と同じように直接目的語がない。

自動詞と比べると、非対格動詞は独特な特性をもつ。すなわち主語は必ず主題であり、直接目的語の意味論的な特徴がある。意味論的な面では、非対格動詞の主語は何らかの変化を表す。その変化は主語の空間的な位置の変化（例：*andare*　*行く*、*entrare*　*入る*、*salire*　*乗る*、*昇る*、*上がる*、*scendere*　*降りる*、*下りる*、*下がる*、*uscire*　*出る*、等)、主語の具体的な変化（例：*cambiare*　*変わる*、*trasformarsi*　*変わる*、*diventare*～*になる*、等)、主語の完全的な存在の変化。変身（例：*nascere*　*生まれる*、*morire*　*死ぬ*、等)、さらに主語の具体的か精神的な状況（例：*rimanere*　*残る*、*esistere*　*存在する*、等）もありうる。

3　新しい総合的な基準の応用

上の説明に基づいて、ここでは、応用言語学的な試みを報告する。試みの目的はイタリア語の近過去における助動詞の選び方について、学習者に能率的に考えさせるということである。対象は、伝統的な文法の説明では、近過去の助動詞の選び方が複雑だと思う日本人学習者である。表３のような短いテキストを利用する。イタリア映画「*Mediterraneo*」(「地中海」G.　Salvatores　監督、1991 年）の最初の２０分について説明したもので、実際に広島市立大学のイタリア語 III のクラスで使われたテキストである[5]。学生達には、まずその映画の始まりを見せて、次にテキストを読んでもらった。ただし実際に使われたテキストには日本語訳は付いていない。

テキストは過去の出来事（つまり映画の内容）について語っている。この場合、日本語では過去を使うはずであるが、イタリア語のテキストを見ると、すべての動詞が直接法現在形である。イタリア語は「presente　storico」(「歴史的な現在形」）という文体がある (Bertinetto　1986)。歴史的な出来事を叙述したり物語を語ったりする時に、イタリア語でよく使われている。過去形と比べると、「presente storico」には演出効果があるため、聞き手の注目を引いたり、感情的に聞き手を話に引き込むために利用される。

表３のテキストの意味を学習者に完全に理解してもらった上で、文法問題（表４）を配った。問題を解いてもらう前に、表２に述べた規則（助動詞 *essere* を要求するのは非対格動詞だけであること）を説明した。非対格動詞とは、自動詞と同じように直接目的語がないが、自動詞と違って、主語が何らかの変化を表わすことも付け加えた。

表３　練習問題１：読解

Mediterraneo (1) – La storia

Seconda Guerra Mondiale. Una nave di soldati italiani arriva a un'isola del Mediterraneo. Otto soldati scendono dalla nave per ispezionare l'isola, ma non trovano nessuno. Di notte ci sono bombardamenti in mare e la nave italiana affonda. Gli otto soldati sull'isola sono molto preoccupati. Per sbaglio, uno di loro spara e ferisce l'asina dell'alpino Strazzabosco. Lui, in collera, urla, piange, poi rompe la radio. Un altro soldato lavora notte e giorno per riparare la radio, ma niente da fare: è impossibile comunicare con l'esterno. Purtroppo, il giorno dopo, l'asina muore e tutti diventano tristi. Dopo alcuni giorni, finalmente, i soldati vedono gli abitanti dell'isola. [...]

地中海（1）－ あらすじ

第二次世界大戦。イタリア人の兵士の船艦が地中海の島にたどり着いた。島を偵察するために八人の兵士が船艦を降りたが島には誰もいなかった。夜になると、沖で爆撃があった。イタリアの船は沈んだ。島にいる八人の兵士達は、とても心配していた。間違って、一人が鉄砲を撃ってストラッツァボスコという山岳兵のロバに重傷を負わせた。ストラッツァボスコは腹を立て、泣き叫び、ラジオを壊してしまった。他の兵士は、ラジを直すために、その晩と翌日、一日中働いたが無駄だった。外と連絡することが不可能になった。残念ながら、次の日ロバは死んでしまった。皆落ち込んだ。数日後やっと、兵士達は島の住民に出会った。[略]

表４　練習問題２：文法練習

Mediterraneo — 地中海 (2)

Presente storico > Passato　歴史的な現在形 > 過去形

1) Una nave di soldati italiani **arriva** a un'isola. (着く)

>.....

2) Otto soldati **scendono** dalla nave per ispezionare l'isola. （降りる）

>.....

3) Non **trovano** nessuno. （見つける）

>.....

4) Quella notte, la nave **affonda** per i bombardamenti in mare. （沈む）

>.....

5) Per sbaglio, un soldato **spara**. **Ferisce** l'asina di Strazzabosco. （射撃する、負傷する）

>.....

6) Strazzabosco **urla**, **piange** e, in collera, **rompe** la radio.　（叫ぶ、泣く、壊す）

>.....

7) Un soldato **lavora** notte e giorno per riparare la radio, ma niente da fare. （働く）

>.....

8) Il giorno dopo, purtroppo, l'asina **muore** e tutti **diventano** tristi. （死ぬ、～になる）

>.....

9) Dopo alcuni giorni, finalmente, i soldati **vedono** gli abitanti dell'isola. （見る）

>..... [...]

この応用現語学的な試みにおいて、学習者は意味論的な観点から自分で非対格動詞を比較的簡単に見分けられるようになった。そして、練習問題を容易に解くことができた。この実験から、非対格動詞が何であるかが分かれば、学習者にとって近過去における助動詞の選び方は極めて分かりやすくなることが示唆される。普通、上のような練習を行うと、学習者の９０％近くが能率的に助動詞の選び方が理解できるようになることが明らかになった（Zamborlin　2005)。

4まとめ

近過去は、イタリア語で最もよく使われる過去形である。従って、イタリア語の過去形を学び始める外国人には、近過去が出発点になる。しかし、上に述べたように、学習者にとって、近過去の助動詞の選び方は、かならずしも簡単なものではない。伝統的な文法の説明とその説明に基づくイタリア語の教科書は学習者どころか、教師さえ混乱させているのである。

能率的に学習者が文法を学ぶために、新しい文法の基準をとる必要がある。イタリア語の近過去における助動詞の選び方の問題はその一つの例である。この論文で提案された意味論的な基準は、便利さを求める単純な方法であるだけでなく、色々な言語に起こる一つの類似の文法的な現象について考えさせる方法でもある。例えば、イタリア語を習う日本人学習者が、イタリア語と日本語の非対格性（Tsujimura　1997　参考)を比べることのきっかけとなることもあると考えられる。

注

１）本稿は１６年１０月２１日東京のイタリア文化会館で口頭発表したものに加筆修正したものである。

２）項は直接目的語であれば主題でもある。例えば、例文３①、②、⑤、⑥を見ると、直接目的語は（*la porta*－ドアを、*un rumore*－物音を、*il tempio*－お寺を、*la palla*－ボールを）主題の特徴を持っているのが分かる。主題とは動詞の表す動作か影響を受ける項である。

３）複合時制において他動詞と同じように助動詞　*avere*　を要求する次のような自動詞は「非能格動詞」（verbi inergativi）と呼ばれる：　*camminare*　歩く、*passeggiare*　散歩する、*viaggiare*　旅行する、*dormire*　寝る、*lavorare*　働く、*ridere*　笑う、*tacere*　黙る、等（表１参考)。その一方で、次のような他動詞は「能格動詞」(verbi ergativi または verbi causativi）と呼ばれる：*affondare*　沈ませる、*aumentare*　増やす、*cambiare*　かえる、*cominciare*　始める、*migliorare*　より良くさせる、*muovere*　動かす, *sporcare*　汚す、等。「非能格動詞」（verbi inergativi）は自動詞である。「能格動詞」（verbi ergativi/causativi）は他動詞であるが非対格動詞として使うことも可能である：*affondare*　沈ませる／沈む、*aumentare*　増やす／増える、*cambiare*　かえる／かわる、*cominciare*　始める／始まる、*migliorare*　より良

くさせる／より良くなる、 *muovere* 動かす／*muoversi*（再帰動詞）動く, *sporcare* 汚す／*sporcarsi*（再帰動詞）汚れる、等。この場合「能格動詞」の直接目的語は非対格動詞の主語になる（Salvi 1988: 49-49）。

例a. Il professore **comincia** la lezione. ［cominciare、始める（能格動詞）］

(S) (V) (O)

先生は授業を始める

例b. La lezione **comincia**. ［cominciare、始まる （非対格動詞）］

(S) (V)

授業が始まる

４）日本で使われるイタリア語文法の教科書（坂本１９７９及び長神２００３に参考）が伝統的な文法論に従っているため他動詞と自動詞の区別しか説明してない。

５）学生達は１コマ９０分週２回の授業を１年間受講した後、中級クラスに入った。

参考文献

BERTINETTO, P. M. (1986). *Tempo, aspetto e azione nel verbo italiano. Il sistema dell'indicativo.* Firenze: Accademia della Crusca.

DARDANO, M., & TRIFONE, P. (1985). *La lingua italiana.* Bologna: Zanichelli.

GRAFFI, G. (1994). *Sintassi.* Bologna: Il Mulino.

HAEGEMAN, L. (1994). *Introduction to Government & Binding.* Oxford: Blackwell.

KATERINOV, K. (1992). *La lingua italiana per stranieri.* Perugia: Edizioni Guerra.

LEPSCHY, L., & LEPSCHY, G. (1993). *La lingua italiana.* Milano: Bompiani.

長神 悟 (2003). 『イタリア語の ABC』東京、白水社

RENZI, L. (cur.), (1988). *Grande grammatica italiana di consultazione.* Vol. 1. Bologna: Il Mulino.

ROHLFS, G. (1969). *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti. Sintassi e formazione delle parole.* Torino: Einaudi

坂本 鉄男 (1979). 『現代イタリア文法』東京、白水社

SALVI, G. (1988) "La frase semplice". In L. Renzi (cur.), (1988): 29-113.

SAVINO, E. (1993). *Italiano in Laboratorio. Educazione linguistica per il biennio delle scuole medie superiori.* Milano: Mursia Scuola.

SERIANNI, L. (1991). *Grammatica italiana. Italiano comune e lingua letteraria.* Torino: UTET.

TSUJIMURA, N. (1997). *An Introduction to Japanese Linguistics.* Oxford: Blackwell.

ZAMBORLIN, C. (2005). "Essere o avere? Oltre le regole tradizionali per comprendere la selezione dell'ausiliare nel passato prossimo. Applicazione glottodidattica delle nozioni di ruolo semantico e di verbo inaccusativo". *Insegnare italiano in Giappone* —『日本におけるイタリア語教育』東京、イタリア文化会館: 39-72